「贈与」＝交換関係について
—社会展望としての意味—

青野　豊一

1 「人は、何によって生きているか」(トルストイ)の読解を通して

この物語は、1881 年(53 歳)に書かれたトルストイの民話の第一作目である。私はこの作品の読解を通して、「贈与」という人と物と事の交換関係が未来社会における有効な理念であるのか、縮小社会における社会経済の主導的駆動力とすることができるか否か、その意味と有効性を検討したい。

私は今まで、このような理想理念を語ることを、ともすると批判してきた。でも、今回、この作品の底に横たわっているトルストイの熱き思いに心寄せることも必要であると思い直した。

＊引用している文は、偕成社文庫シリーズの『トルストイの民話』(大橋千明訳)

「贈与」は、人間の社会関係の中で、何ものより、武力より強い影響力を持つ。見返りを期待することなく、進んで物と人と事の贈与＝交換を申し出るものである。それも、勝者が、生き残った者がする贈与という行為は、強力である。だから、これに対して無視したり、この行為をバカにした言動をしても、その当事者にとってはそれが負い目としていつまでも心にこびりついてしまう。これを払しょくするには、答えるには、また贈与した人や勢力と同等になるには、自らが返礼としての「贈与」をするしかない。

さて、この「贈与という交換形態(1)(互酬制)」の関係の輪が広がることで、「市場での貨幣による商品交換関係(2)」と国家や地方行政による「収奪・再分配という交換関係(3)」に対抗することで、今後の本格的な縮小社会の諸問題に有効に対応することができるようになるのであろうか。今の私たちの生活ではこの贈与に基づく社会関係が弱くなっているのだから、これを再度活性化させることで、このような三つの経済活動のよりよい均衡、対抗のつり合いがとれてくるということは、私も理解する。しかし、・・・。

トルストイの民話のいくつかを読むと、「贈与」という交換形態(互酬制)の関係を、他者との人格的つながりを通して得られる「社会的な自由＊」を、崇高なものとみなしていることが感じ取れる。社会状況が悪化しても、この贈与＝交換という交換（経済）形態が機能しておれば、またこの気持ち(慈悲・愛)が多くの人たちの中にシステムとして機能しておれば、贈与と返礼という互酬関係による人間関係・社会関係が強く広く浸透しているならば、金銭的・物質的に今より貧しくても助け合って生きていけると、訴えかけているように思える。トルストイは、このようなことを理想社会形成の基盤として提示している。

＊「社会的な自由」とは、共同体の中で生きるという意味

この物語に登場している天使「ミハイル」は、神様の命に背いて地上に落とされている。そこで、三つのことを学ぶように言われる。その三つとは、

<u>①人間の中には何があるのか?</u>

この言葉を私なりに解釈すると、・・・

現実の生活では、社会関係では物質的な欲求や欲望が交錯し、自分の利益が最優先されているかのように思っている人が多い。だが、実は、日々の社会的生活を営む上で最も根源的なものが別

にある。人がこれまで社会を形成して生きて来れたのには、経済的利害以外に、地下水脈のように流れているものがある。これを見つけなくてはならない、という意味であろう。

②人間には何が与えられていないのか?

日々の生活の中で、人間には何が決定的に欠落しているのか、何を認識できないのか、何ができないのかということであろう。

③人間は何によって生きているのか?

人間は何を支えとして、現在と未来を生きようとしているのか。これなくして明日を生きていくことができないような決定的な事は何であろうか、ということであろう。人は過去からの規定性だけで生きているのではない。未来の姿を思い浮かべるからこそ、今を生きていけるのだ。この明日を生きていくエネルギーの源は何であろうか。

★以下の文章中の「愛」や「神」の言葉を「贈与」と「返礼」という互酬関係を意味するものと読み替えていきたい。この贈与と返礼には、物だけではなく、精神的なものや情報等も含まれている。

天使の羽をもぎ取られた「ミハイル」は、何物も持たず裸で地上に落とされたが、明日の生活にも困窮している貧しい靴屋に助けられる。そして、服とパンを与えられる。その時、①のことを学ぶ。

ミハイルに与えてしまうと明日のパンがないというのに、それなのに最後のパンを食べさせるという行為を、それを弱者(ミハイル)にするということの体験を通して、人間の中には「慈悲の心・愛」が含まれていることを理解する。物質的損得勘定では割り切れないことが機能していることを、はっきりと認識する。

その後、ミハイルは、この靴屋の弟子として働きだす。そして一年後、金持ちがこの靴屋に注文に来る。生きていることに自信と余裕たっぷりの、そして貧乏な靴屋をバカにしたような態度の男の背後に、昔の仲間である別の天使の姿を見つける。この天使は、この金持ちの寿命が尽きたので魂を抜き取りに来ていたのだ。それなのに、この金持ちはまもなく死ぬのに、そのことに気付いていないことを知る。そこで、②のことを理解する。

人間には、自分の心身にとって何が必要なのかを知る力が与えられていないことを知る。人間は何時かは死ななければならないのだが、それが、今晩か、明日の朝かもしれない。明日のことが、分かっていない。死の訪れが定かではない日々を生きているのが人間と言う生き物である、ということであろう。

自分のことが、一番分かっていないのだ。だから、自分が生きているこの現時点に今何をしなければならないかを自明のこととして理解できる力を持っていないことを知る。他人の事や社会的出来事を批判的に話していても、・・・。自分という「生身の身体を介在」した思考がなかなかできないのが、人間という存在なのだということだ。

そして、六年後、自分が神の命に背くきっかけになった双子の女の子に再開する。その二人の生みの親の魂を抜き取ったが、ミハイル自身であることを思い出す。

子供たちは、隣の人に育てられていた。他人の女が乳を飲ませ、ここまで大きく育ててきたことを知る。この二人の子供の今までの境遇を話しながら、育てしてきた女が感極まって泣いている姿を見て、③の「人間は何によって生きている

のか?」を理解した。生まれたての子供という決定的な弱者をまったくの他人が育ててきたという行為を知り、ミハイルはこのことを理解した。

そして、これらの三つのことを理解した天使は、天の神のもとに帰ることになって、今までのことを靴屋夫婦に話し出す。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

＊以下は天使ミハイルが語っている言葉を訳文そのまま記載しているが、数字と下線は私が付けくわえ、＊は私の補足である。

私には、あらゆる人が自分のことを思いわずらってではなく、愛によって生きているのだ、ということが分かったのです。(＊双子の女の子の)母親には、子供たちが生きていくために何が必要かを知る力が与えられていませんでした。金持ちには、自分自身に何が必要か(＊何をしなくてはならないか)を知る力が与えられていませんでした。・・・私が人間だったとき、生きていられたのは、自分で自分のこと(＊損得勘定)を思いめぐらしたからではなく通りがかりの人(＊靴屋)とその妻に愛があって、私を哀れみ、愛してくれたからです。みなしごたちが生きていられたのは、その子(＊双子の女の子)たちのことを思いめぐらしてくれる(＊口では同情的なことを言いながら、心では損得勘定を計算している) 人たちがいたからではなく、他人の女(＊育ての親)の心に愛があって、その子たちを哀れみ、愛してくれたからです。すべての人が生きていけるのも、自分で自分のことを思いめぐらしているからでなく、人々の中に愛があるからなのです。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そして、さらに、次のように述べている。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

私は前から、神様が人々に生命をお与えになって、人々が生きていくことをお望みになっておられるのを知っていました。今、私は、さらにもう一つのことを悟りました。

私が悟ったこととは、❶神様は人々がバラバラに生きていくことをお望みになっておられない、だから、❷一人ひとりの人間に、自分にとって何が必要かをお示しにならなかったのだ、そして神様は❸人々が心を一つにして生きていくことをお望みになっておられる、だから、すべての人々に、自分にとっても、みんなにとっても何が必要かもお示しになられたのだ、ということです。

今こそ私は悟りました。❹人々は自分のことを思いわずらって生きているというのは、ただ人にそう思われているだけであって、❺人々は愛によってのみ生きているのです。愛の中にいる人は神のなかにおり、神はその人の中におられます。何故なら、神は愛だからです。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

こう言って、天使は天に帰っていった。

❶は、他の人から離れて孤立しては生きられないことを、社会の中でいきてこそ人間となるということ。人間は、社会的動物なのだから、助け合って生きなくてはならないということであろう。

❷は、個々人としては、私たちが社会の中で生きていく上でどうしなければならないかを、明確に自覚できないということ、つまり、人間は自分のことが一番わかっていない生き物であるとの意味であろう。

例えば、今後の縮小社会に向けてどうしなければならないかを自明なこととし

て理解できない、ということである。人は、幻想を見たがる。こうであってほしいという夢を抱きその方向で現状と未来を解釈する傾向が強く、そのため、現時点の現実を直視できないのだ。見たいと思っていることしか、その色眼鏡を通してしか、自分の住んでいる世界を理解できないという致命的欠陥がある。

だから、私たちは、

Ⅰとんでもない最悪の未来社会像と、

Ⅱ縮小社会となっても十分暮らしが成り立つことを、

Ⅲそして、その縮小社会が素晴らしい社会となりうる可能性を、

物語として語りかけなくてはならない。人は理屈では動かないのだ。物語性のある未来像が指し示されたとき、その言説の空間の中に自分が位置づけられた時、問題を自分のこととする。だから、多くの人たちに、この物語(夢)を提示しなくてはならない。理性的判断を強要しても、反発を誘発するだけのことが多いのだ。私たちは、「生身の身体を介在」させた語りを文章化しなくてはならない。

❸は、一個人としては理解できなくても、社会総体を知的に理解しょうとすれば、この現実社会に「生身の身体を介在」させて諸活動をしていくことに努めると、「自分にとっても、みんなにとっても、今何をしなくてはならないか」がはっきりしてくる。このような意味であろう。

❹は、ともすると、今の世は損得勘定だけで人が動いているように思えるが、これは人間社会を表層的に理解しているだけであって、実はそうではないのだ。多くの人は、人は経済的利益で行動するのであって、これ以外の行動動機は観念的であり独善的であるとみなしていることが多いが、・・・。しかし、歴史と時代の中に生きている人を注意深く観察すれば、実は、そうではない。人間の中には、「みんなのために、一人のために」という相互扶助(互酬交換関係)の関係性と心情も、きちんと息づいている。このことがはっきりと意識できないだけなのだ。このような意識が人間の中にあるからこそ、人間社会が今まで維持されてきたのだ、という意味であろう。

❺は、人間は、お互いに物と人と事の贈与と返礼という交換関係(相互扶助関係)を通して、明日への希望を抱くことができる。この扶助関係のことを宗教的に述べるのであれば、隣人愛に満たされた世の中となれば、明日への希望をもって生きていくことができる、となろう。

ここに書かれていることは、このような贈与関係の循環を通して、争いを避けて、人は人を信頼でき、希望を抱いて明日を生きていけるという意味であろう。「愛の中にいる人は神のなかにおり、神はその人の中におられます。」という言葉に、トルストイの真意が語られている。この民話を通して、以上に述べてきたような理解をすることができよう。

トルストイは、貨幣経済の浸透が増してきたロシアの 19 世紀末に、このようなことを他の民話でも繰り返し滲(し)み出している。

2 主導的経済形態

私たちは、社会生活をしている。この社会は、先に示した三つの経済関係(1)(2)(3)が組み合わされて成り立ってきた。これまでの歴史的社会では、この三つのうちのどれかが主導的駆動力となっていて、社会の在り方の大枠を規定してきた。

近現代社会は、「市場での貨幣による商品交換関係(2)」が主導的役割を果た

してきた。人や社会の可能性は、この交換形態のもたらす経済的可能性によって大きく制約されている。日々の生活では、生きていくための諸条件は、金銭での売買を通して獲得していくことが当然のこととされている。私たちの生活の多くは、市場での貨幣による交換を通して組織されていると言ってもよい状況となっている。これは個人だけの事ではなく、家族関係も、そして自治体も国家行政もこの交換関係に適応することが求められている。このような経済関係が人間関係や社会的出来事や、政治的、そして文化的にも、その動機としてみなされている。この交換関係による経済的利害とその要請に適合していくことが、人が生きていく上での唯一の可能な選択であるかのごとくまで言われているのが現実であろう。この交換関係が、人間の運命を掌握しているかのごとき思考がまかり通っている。

このような市場交換関係から今の資本制生産様式が生まれてきたが、それが物と人と事の贈与と返礼という交換関係が主導となる社会へと代わっていくことを、トルストイは心から望んでいたようだ。

このことについて思考する時、大切な事は、中心的役割を果たしてきた交換様式・経済活動が移り変わってきた歴史があるということであろう。この移動によって、社会の在り方が大きく根底的に変化してきたことを、まず理解しなくてはならない。そのためには、現在主導的な「市場での貨幣による商品交換関係」を絶対視することなく、まず相対化して思考しなくてはならない。

さて、ここで、資本制生産様式と市場経済の違いをはっきりさせなくてはならない。これを私なりに整理すると、市場交換経済は古くからなされているものであり、資本主義経済は近代になって西ヨーロッパから全世界へと広がってきたものである。この経済関係が広まるには、それがなしうる条件づくりを時の国家権力が政策として種々のことをしなくてはならなかった。特に、「労働者」と「土地」、そして「貨幣」等を商品として市場で売買できうるものとしなくてはならなかった。これらは、もともとは売買のために作り出されたものではない。それが、労働市場、農産物・不動産市場、金融・資本市場にて取引されるものとなるには、多くの大変な社会的困苦や動乱を経て形成されたものである。国家による制度的な整備がなくては、市場で需要と供給の法則にしたがうことが最適な事であるとするような幻想がまかり通ることはなかった。つまり、資本主義社会とは、「労働者」と「土地」、そして「貨幣」等をさも商品であるかのごとくみなすという人為的システムである。市場での商品交換が自然発生的に少しずつ広がったものではない。それなのに、市場の自己調整能力を過大に信用して、これが社会を組織する原則(たてまえ・幻想)としているのが、今日の社会の実態であろう。

＊この箇所は、ポランニーの言葉を使って書いている。

近代社会において、西ヨーロッパにおいて、「市場での貨幣による商品交換関係(2)」と国家と地方行政による「収奪・再分配という交換関係(3)」が固く結びついた社会システムが出現した。これが、現代社会を覆いつくさんとしている。

水野和夫氏は、『資本主義という謎−「成長なき時代」をどう生きるか−』(水野和夫　大澤真幸　NHK　出版新書)の中で市場経済㊀と資本制生産様式㊁との関

係を次のように述べて（＊要約）いる。
水野／ 曰は需要と供給を一致させる機能であって、無機質的なものである。そして、曰は資本家が利潤を極大化させるという強い意志をもって行っているものである。これを階層構造として見ると、一階にあたる曰は共同体等の慣習的なきまりから離れて競争原理に基づいて生産と消費を仲介するものである。曰はその上にあって、その時々の上層階層と結びつくことで才覚と最強者(資本保持者)の権利が君臨して、空間の拡張と時間の差異を利用して巨額の資本の蓄積が可能となるものである。

このことを私なりに少しく詳しく述べれば、今世界で進行しているのは、政治と巨大企業との癒着である。グローバリズムの進行で万国の資本家たちは団結しやすい条件にある。食産複合体、医療産業の複合体、軍需産業の複合体、エネルギーやメディアや金融の業界が政府や政治家や官僚等に強力な働きかけをして、政治献金や官僚の天下り先を提供して、社会的な自己防衛としての今までの諸法律を企業にとって有利なように法改正をさせてきた。さらに、このような政策が当然なこととして巨大メディアを通して世論形成がなされてきた。そしてさらに、税金を使って巨大民間企業の損失の補てんをしたり、社会保障費が減額されている。そのため、私たちの生活と労働条件がますます厳しくなっている。

独り言・・・快適な生活?・・・

今日(8/26)、朝の 4 時に目覚める。外は、まだ暗い。そこで、畳の上で、まどろむことにした。布団の上は、暑いのだ。

布団の上では、私の代わりに、猫と犬が横になっている。朝がひんやりしだしたので、猫はかけ布団の上で円くなって寝ている。犬は、私の枕に頭をのせて、人間のように横になっている。このようになってしまったのは、何時からだろう。我が家に猫が来てからだろう。犬は猫のしていることが気になり、同じことをする。そうしないと人間からの愛を得られないと思っているらしい。犬は猫が夜中に私の布団に来るのまでは一人離れて寝ているのに、音もたてずにこっそりと猫が来ると、すぐ布団の上に来る。困ったものである。まぁ、なんと、微笑ましい生活であろうか。この二匹は、我が家の家族となっている。

起きたのは、5 時を少し回っていた。それから着替えて外に出て、息子の嫁に送る農産物の箱詰めをした。それが終わると、今日の農作業に必要なものを、軽トラックに積み込む。そして、田の様子を見に行く。稲の穂が出てきたので、猪が活発に動き出している。先日、真昼に稲穂の垂れた田の近くで少し大きくなった瓜坊が 2 匹、昨日は親と小さな猪が道路の真ん中でいた。クラクションを鳴らそうかと思ったが、突進して来られると車が傷むので、お通りになるまで、静かに待つことにした。

6 時半前に食事を終えて、今日働かなくてはならない田んぼに行く。今日も、朝から暑い。いや、暑いというより、蒸すのだ。湿度 100%の蒸風呂の中で仕事をしているようだ。曇っているので太陽が出ていないのに、少し動くだけで大粒の汗が額から「ぽとぽと」と落ちて来る。服は、すぐびちょびちょになる。午前中にしなくてはならないことが、田に行くと、次々と思い浮かぶ。

でも、急いでしないことにした。休み休み、ぼちぼちすることにした。今年の 8 月 10 日に、私の農作業の方針を変更したのだ。齢 65 を過ぎると、年々体力が目

に見えて落ちて来ると人から聞いている。もう、無理をしないことにした。そして、一週間に一日は、必ず休みの日を作ることにした。休日は、家から出ることにした。家に居たり田に行くと、どうしてもしなくてはならないことが見えてしまう。そうなると、またまた動いてしまう。だから、本と水筒を持って出ていくことにした。でも、90 歳を越す母がいるので、昼前には帰り食事の支度をするので、遠くには行かない。

さて、この暑い中での労働は、収穫物を得るためには、どうしてもしなくてはならない。どのような時代や社会になっても、・・・。「縮小社会」では、化石燃料の枯渇がより明瞭になってくると、この労働は、より一層激しくなるであろう。

午前 11 時、朝の仕事を終える。さて、ここから、現代の石油文明の恩恵を受ける。温かいシャワーを浴びて汗を流す。冷蔵庫から冷たい飲み物を取り出し、一気飲みをする。そして、クーラーの下で扇風機の前で寝転ぶ。これは、素晴らしい文明であろう。蛇口をひねるとお湯が出るなんて、なんて快適な事であろうか。このようなことは、やがては困難なことになることが予想される。便利さ、快適さばかり追求している工業文明も、この先は見えているが、・・・。

それから、私は普段は横になり漫画をめくっていると、いつのまにか寝ている。それが、何故か、今日は、トルストイの民話を読みだした。このようなものを読むと、寝付かれないことになった。寝て体力を回復しなくてはならないのに・・・。

3 現代における贈与経済の意味

トルストイは、互酬原理を重視した生活への回帰の必要性をにじみだしている。また、互酬原理に基づく経済活動の再評価は、現実社会への批判として、多くの人たちが今までも述べてきた。でも、この互酬制という経済的交換原理(平等を重視して自由を規制する交換関係(1))の悪の側面について述べられていないことが多い。どのような経済活動・交換関係にも、大きな問題があるのだから、この賛美で事を済ませてはいけない。ここにとどまっていては、どうにもならない。

私は、次のように思う。私たちが作り上げてきた経済活動は三つしかないのだから、別の新しい理想社会のシステムがどこかにあると夢を見るのではなく、この在り方を工夫していくことが、うまく組み合わせていくことが、現実的であろうと思われる。

この互酬制という経済活動には、市場原理に基づく経済活動を対抗させると効果的なのだ。悪に、悪のシステムで、中和・相殺していくしか方策はないであろう。この市場交換関係は平等を犠牲にして自由を重視する経済関係(2)であるから、これと互酬経済形態との中和・相殺をうまく行うしかない。

そしてそれには、政治による「収奪・再分配」の交換関係(3)を強くして、社会的問題を解決していくことが考えられる。現状では、グローバリズムの進展とともに政治の力が相対的に弱まっている。だから、この政治の力を強めていくことで、社会の構造改革をしていくことで、社会防衛としての政策(「収奪・再分配」機能の再整備)を実施していくことが一つ方法として考えられる。

今後の縮小社会は労働の安定性と家族の安定性が激しく揺さぶられ、そして経済の成長がはっきりと破たんしていくのだから、これに対応した新たな公共性のある政策が必要となる。その対策の

一つとして、ベーシック・インカムは、持続が可能となる国家的政策・制度設計の一つとなるであろう。しかし、この実現も、現状の国民意識では、なかなか難しいことが予想される。

若森みどり著『カール・ポランニーの経済学入門』(平凡社)に、次のように書かれている。

「では、社会の自己防衛が社会的利害の保護を求めるとき、社会的利害と階級行動とはどのような関係にあるのだろうか。・・・、諸階級は、もっぱら自己の階級に属する人々の経済的利害を追い求めるだけでは他の階級の支持を集めることはできないが、社会的利害の保護の担い手としての役割を演じることで他の階級の賛成を取り付け、社会の自己防衛の制度化に貢献することができる。・・・実際、社会史の展開において、ある階級が指導的役割を担うことができるかどうかは、その階級が自分自身の利害を超えてどれほど広く多様な社会全体の利害を代表できるということに依存する。」

しかし、ベーシック・インカムという社会防衛のための政策を、労働者階級が中心になって中小の商工業者や農民とともに求めるという事態は、現状ではとても予測できない。階級意識を持った人たちが、どこに、どの程度いるといえるのであろうか。残念ながら、今の日本社会には、労働者政党すらない。ブルショワたちに対抗するプロレタリアという階級意識は、はなはだ薄いのが現実である。

だから、現状では、この国家による社会福祉政策(収奪・再分配)も、実は、大きな悪(友愛を求めて、国家行政階層序列構造を強化する)につながりかねない。現状では、多くの人々がファシズムにからめとられかねない。

これからの縮小していく社会経済では、現在のシステムでは生活はどんどん悪化していくのだから、当然のこととして人は、悪化していく社会では政治の力発揮を求める声が高まるであろう。でも、これだけに頼っていては、地獄の循環という事態となる。

だから、善の理想の方策を追い求めるのではなくして、今までに私たち人間が作り出してきた社会経済システムを、問題点を指摘されてきた方策をうまく組み合わせて、それをうまくコントロールできるようにしなくてはならない。人間がこれまでに見出したのは、この三つの経済活動・交換関係に基づく社会しか作り出せていないのだから、・・・これからも、これ以上の社会関係を創造することは難しいであろう。

でも、このコントロールは難しい。この三つのどれが主導の経済形態になっても、これが偏ると、それはとんでもない「縮小社会」になるであろう。

要は、近代になって成立した「国民国家」を前提にした社会構想は、どれもうまくいかないことになると思われる。大きな政治・経済圏を前提にすると、このコントロールは必ず失敗するであろうことが予想される。うまくコントロールするには、人々の自覚性と自主性を引き出すことしかないであろうから、この三つの交換関係のバランスをとるには、狭い範囲の土地と少ない人口を前提とした交換関係でしかできないことになる。つまり、今まで当然のこととしていたことを止めなくてはならないことになる。それは、脱近代の在り方を思考・試行していくことになるようだ。主権国家の解体＊が必要となるであろう。新たなる「中世」の到来か?しかし、主権国家の解体には、国家間対立を防ぐ世界連邦らしきものができ

ないと難しい。現実的には遠い話となる。

さて、「中世」とは、どのような社会であったのであろうか。具体的にその歴史的出来事とその意味を学ばなくてはならないようだ。私たちは、真剣に今後の社会の在り方を展望しなくてはならないが、その時、理想を求めて意識ばかり先走った空論にならないようにしなくてはならない。今までの歴史を踏まえて社会を展望をしたいものだ。

4　山田広昭「マルセル・モース(1872-1950年)と協同組合運動」を参考にして

＊山田氏の見解は〇印で、その後私がモース『贈与論』1925年(森山工訳　岩波文庫)から引用している。

〇モースは、当時のフランスの協同組合運動に積極的に関わり、そこに現代において忘れられている集団的倫理を再度復活させることに意義をみいだしていた。労働者たちのモラルを高めること、社会的意識の新しい可能性を感じ取れるものとして、国家行政に頼る政策ではなくして、協同組合運動を考えていた。これは、自由と平等に、新たに「友愛」の意識を喚起することであった。

そのために、古代社会や未開社会＊に観察された交換＝贈与の倫理を学術研究の枠を踏み越えて、現代にも通用する提案の書の体裁をしている。

「人が物を与え、物を返すのは、そこにおいて人がお互いに「敬意」を与えあい、「敬意」を返し合うからである。・・・それはまた、何かを与えることにおいて、人が自分自身を与えているからでもある。そして、人が自分自身を与えるのは、人が自分自身を(自分という人を、そしてまた自分の財を)他の人に「負っている」かなのである。」　モース『贈与論』より　以下同じ

＊「未開社会」と書いたが、これは今の私たちから観ての意見である。ひょっとすると、私たちの方こそが、お金のあるなしに深くとらわれた生き方の方こそが、本当の意味で「未開」かもしれない。だから、未開の地というより、強力な国家権力の確立していない地であり、資本主義経済が機能していない社会であり、私たちとは異なった別種の高度な社会システムが機能している社会と言えよう。モースは、「アルカイック(古風・素朴な・たくましい等の意味)」な社会という言葉も使用している。この著作の副題は、「アルカイックな社会における交換の形態と理由」である。

「・・・その交換体系は、今からたぶん百年とさかのぼらない最近まで、フランスの農民の間とか、フランス沿岸の漁村とかで行われる交換の体系よりも、おそらくずっと強烈で急迫したリズムで行われる交換の体系である。彼らの経済生活は広い範囲におよんでおり、島々の境界を越え、地域語の境界を越えている。それは一大交易である。彼らの下では、贈り物を与え、贈り物を返すことが、はっきりと売買の体系にとって代わっているのである。」

「この人たちは、売るという観念も、貸すという観念ももっていないのに、にもかかわらず、売るとか貸すとかというのと同じ機能を有した法的・経済的な諸々のやりとりを行っているのである。」

「以上から分かるように、人類の中には、勤勉であり、たくさんの剰余物を作り出していながら、私たちに馴染みのあるものとは異なる形態のもとで、また異なる理由によって、多量の物品を交換する術を知っていた。そして、今でも知っている、人々がいるのだ。」

「この倫理と経済は私たちの諸社会においても依然として恒常的に、言うなれば潜在的に機能していることが認められることだろう。私はまた、ここにおいて見出されたものは人間存在の基底の一つであると考えている。私たちの諸社会もこうした基底の上に建てられているのだ。」
「修道士のような生活も、シャイロック＊のような生活も、ともに避ける必要がある。ここに述べている新しい倫理は、おそらくは現実と理想が適切に、バランスよくまじりあうことに存することになるだろう。」
＊シャイロックとは、シェークスピアの『ベニスの商人』に登場する金貸し

幸いなことに、現在でもまだ、すべてのモノが経済の論理に飲み込まれてはいないし感情的価値も機能しているので、「私たちは、アルカイックなものに、基礎的な原理に、部分的にであれ戻ることができる。また、戻らなくてはならない。そうすれば私たちも、生と行動を導くある種の動機を再び見出すことができるだろう。」
＊モースの政治的立場
ジャン・ジョレス(フランス社会党の指導者)と深いつながりがあったが、マルクス主義者ではない。
「次の言葉をもって結論としよう。あたかも手袋を裏返すように社会を変革しうるような革命は存在しないと信ずる者にとって、全体的な社会変革という観念は虚偽の観念であると信ずる者にとっては、革命とは、多少とも大規模な、多少とも急激な一連の改革、また多少とも急進的なその種のものでしかありえない。」

○『贈与論』の中に書かれている「全体的社会事象＊」には、お互いに矛盾したような複数のシステムが混在している。
＊「全体的社会事象」とは、法的・倫理的・政治的経済的領域、そして宗教的・美的感性のことなどを、それらすべての領域や側面が混然一体となって表れてきている社会現象のことである。これは、ポランニーの「社会に埋め込まれた経済」という言葉に通じるものであろう。
●特別な価値をもたない日用品の「取引」としてＡとＢの交換による等価性は、その場限りのものとして繰り返されている。ここには、取引による当事者間の関係性は、そんなに強固ではない。この関係は、市場経済における開放性に通じるものであろう。しかし、交換された物に関係した人たちの関係性をまったく解消することはありえない。
●「クラ」として書かれているのは、共同体と共同体の間で存在して機能するものであり、典型的互酬交換関係であり、これが共同体間の関係における支配・被支配の関係を抑制して同盟関係を作り出すものとして機能していることになる。そして、この関係性は、そのたびに社会関係を設定し直し再強化するものとして機能している。
「この間、ホラ貝の音と弁者の口上が、その場の全員に対して引き渡しの儀式的性格を印象付けている。こうした式次第の全体を通じて当事者が追い求めているのは、気前の良さを示すことであり、何からも束縛を受けず自由であるさまを示すことであり、・・・そして自らの偉大さを示すことである。そうであるにもかかわらず、結局のところそこに作用しているのは強制のメカニズムなのだ。それは、物による強制のメカニズムとさえ言えるものなのである。」
●「ポトラッチ」は、短期的には「譲渡」、一方的贈与とみなされる。しかし、招待された部族や個人もまた、この「ポトラッチ」を行うので返礼をしていることになる。

これは、気前よく与えることで他者を圧倒して階層性を創出してしまうことにもなりかねない。でも、これは、このことによってその人の財を使い切ってしまうので、一定以上の巨大な力をもつことはなくなることになろう。つまり、適度な権力形成にとどまってしまうことになる。これは、「収奪・再分配という交換関係③」に通じるものであるが、それを蕩尽(財を使いつくす)によって防いでいる。この贈与も、このような関係性をそのたびに設定し直し再強化するものとして機能している。モースは、「クラ」はあまり豊かでない地での交換(一種のポトラツチ)であり、ここに取り出している「ポトラッチ」は物質的に豊かな地でのもので、先の発展型・変形型としている。

北米インディアンの事例として、次のように書いている。

「ここにあっては、消費と破壊は本当に際限がない。ある種のポトラッチの場合には、人は自ら持てる物をすべて消費しなければならず、何も残しておいてはいけない。みんなが競い合ってもっと富裕になろうとし、同時にまたもっとも激烈な消費者であろうとするのだ。すべての根底にあるのは敵対と競合の原理である。・・・政治的な地位や、あらゆる類の位階は、「財の戦争」によって獲得される。・・・いくつかの場合においては、与えること、お返しすることはもはやどうでもよく、破壊することが大事となる。・・・そこにおいて莫大な量の富が恒常的に消費され、人の手から手へと移転しているのである。」

「ポトラッチにおけるこの破壊の慣行には、さらに二つの動機がかかわっている。・・・財の戦争では、・・・一方では、自分の財産を自分で殺し、他人がそれを獲得できないようにする。他方では、他人に財を贈与して、お返しをするように相手を仕向けるか、あるいは相手がお返ししきれにないほどの財を贈与することで、この相手の財産を殺すのである。」二つ目は、財を霊に、先祖に引き渡すことである。

このように、私たちから観て、単純には相互扶助としては言い難いものを含めて複数のシステムを組み合わせることで、古代や未開(アルカイックな)社会で互酬関係主導の社会が維持されていることを、モースは示している。これは、ある意味できわめて高度な社会システムであると言えよう。

○さらに、彼はこのようなシステムを解明していくことで、信用という観念があらゆる交換には存在していることを指摘している。

「・・・複合的現象である贈与、とりわけそのもっとも古い形態、つまり全体的給付という形態(＊5で説明)・・・における贈与である。そして贈与は必然的に信用という観念をともなうのだ。」

「友人や隣人をすべて招いて大規模なポトラッチを行うとき、・・・物をそこで濫費しているだけのように見えたとしても、・・・第一の目的は自らの負債を弁済することである。」これを大々的儀式で執り行う。「第二の目的は、・・・そうすることで自分自身のため、さらには自分の子供たちのために、・・・ポトラッチの祭宴で贈り物を受け取る人々は、それを貸し付けられたとものとして受け取るのであって、・・・何年かの期間がたったのちには、利子をつけて返済をしなくてはならないのである。・・・自分が死んだ時、その子どもたちの生活が安泰あるように保証してくれる手段としてポトラッチを捉えるよ

うになっているのである。」
「英領植民地のインディアンの経済シスは、文明化された諸民族の経済システムと同じ、信用に立脚している度合いが大きい。・・・こうした取引はそれに保証を与えるため、公の場で行われる。負債を請け負うことと弁済をすること、これがポトラッチである。・・・部族のすべての人々が総体として所有している資産の総量は、現に存在している価値の総量を大幅に上回ることになる。つまり、私たちの社会で一般化しているのと事情は似ているのである。もし私たちが、未払いの負債をすべて一度に相手に弁済してもらおうとすれば、・・・破滅的恐慌が惹き起こされ・・・。」

このように、この「信用」ということが、社会の発展によって成立したのではなく、昔から、そして未開(アルカイックな)社会でも存在しているのであって、この贈与＝交換関係は私たちの対人関係を基礎づけるものであり、あらゆる経済形態の源であることを指摘している。つまり、「互酬交換関係(1)」が、「市場での貨幣による商品交換関係(2)」と国家や地方行政による「収奪・再分配という交換関係(3)」の基底をなしていることを示している。

さて、まとめると、この贈与＝交換関係にはいくつかの原則があることになる。「贈与」しなくてはならない、受け取らなくてはならない、そして「返礼」しなくてはならないという義務的なのと、「気前よく」贈与することである。自分の好意をモノに込めて相手に渡さなくてはならない。しかし、この最後の「気前よく」には、その程度の差が生じて来る。ここから、贈与関係の形態も変容してくる。この「程度の合意」形成は難しく、そのたびに両方の当事者たちの間で、彼らの全存在をかけて獲得しなくてはならないものである。「ポトラッチ」は、この交換のわずらわしさと浪費性を、そして敵対へと向かいかねないという合意形成の危うさを表している。

5 「全体的給付という形態」と
「全体的社会事象」について

「私たちの経済組織や法体系に先立って存在してきたあらゆる経済組織・法体系においては、財や富や生産物が、個人と個人とが交わす取引の中でただ単純に交換されるなどということは、ほとんど一度として認めることができない。」
「こうした交換は多量にのぼるが、地縁集団も家族集団も、道具その他を交換で得ずとも、別の機会に自前で賄うことができる。したがって、これらの贈り物は、もっと発達した社会における交易や交換と同じ目的に資するわけでない。目的はまずもって倫理的なものである。それが目指しているのは、当事者である二人の人物の間に友好的な感情を生み出すことになるのだ。・・・誰一人として、贈られたプレゼントを拒むことはできない。」
「第一に、お互いに義務を負い、交換を行い、契約を交わすのは、個人ではなく集団である。・・・第二に、これらの集団が交換するのは財や富だけではない。動産や不動産、経済的に有用性のあるものだけではないのである。交換されるのはなによりも、礼儀作法にかなった振る舞いであり、饗宴であり、儀礼であり、軍務であり、女性であり、子供であり、踊りであり、祝祭であり、祭市である。もちろん祭市では物が取引されるし、富が循環するのだけれども、それは契約のさまざまな契機や要素の一つに過ぎないのであって、契約それ自体はそれよりもは

るかに一般的であり、はるかに恒常的なのだ。そして最後に、これらの給付と反対給付は、贈り物やプレゼントという、どちらかと言えば自発的なかたちで行われるのだが、それにもかかわらずそれは、実際のところまったく義務＊によってなされている。この義務を果たし損なえば、私的な戦争もしくは公式の戦争となったほどである。私は以上のすべてを、全体的給付の体系と呼ぶことを提案した。」

ここでの義務とは、規範に基づいた法的なものと理解しなくてはならない。このような義務的行為によって、部族間の和解・相互了解が成立するとされてきた慣習である。だから、「義務」を現代的な意味で理解してはならないようだ。倫理的な目的のために、仲良くなるための義務＝自発的と理解しなくてはならない。これは、この体系の持つ拘束力を表している言葉である。別の言い方をすれば、モノのやりとりは、それを行っている人と集団の全存在のやりとりであり、生きることの意味の根幹に触れているものであろう。

「物質的生と精神的生、そして交換が、そこにおいては我欲を超えたものとして、かつ義務として、機能している。それに加えて、この義務というのが神話的で想像的な仕方で表現されている。」

しかし、それは「これらの給付がいわば自発的であり、見た目には自由で見返りを求めない給付としてなされているにかかわらず、それがじつは強制力にもとづき、利害関心にもとづいてなされているということである。」と、みなすこともできる経済形態でもある。

「私が論述してきたさまざまな経済行為の、そのすべてを鼓吹しているのは、ここでもまた一つの複合的観念である。・・・純粋で自発的で、純粋に見返りを求めない給付という観念ではなく、また、純粋な損得勘定に基づいた有用物の交換という観念でもないからである。・・・これらが混じり合った一種の混合物なのだ。」

この贈与関係は自由で非打算的でありながら、実は拘束的で打算そのものなのだ。そして、次のように述べている。

「私たちがこれまで使ってきたさまざまな語彙は、・・・それ自体としてはさほど正確なものではない。・・・自由に対する義務とか、寛大さ、気前の良さ、奢侈に対する倹約、利得、有用性とか、私たちはこうした諸概念をともかく対立し合うものとして捉えがちであるけれど、法と経済にかかわるこれらの概念をこのあたりで見直すのがよいのではないだろうか。」

そして、モースはまとめとして、次のように書いている。

全体的社会事象としてのこのシステムは、「社会の全体を活性化させ、あらゆる社会制度からなる全体を活性化させるということだ。」

「これらの現象はすべて、法的現象であると同時に経済的現象であり、宗教的現象であり、さらにはまた審美的要素をもつ現象であり、社会形態にかかわる現象であり、等々である。」

法的には「組織されていない不定型な倫理意識」と関わり、宗教的には組織されていない「不定型な宗教的心性」が関与し、経済的現象としては経済的観念(価値・功利性・利益・富等)がいたるところに見られるが、それは今日の私たちが理解するのとは異なっている。また、審美的にはすべての現象は審美的感情を沸き立たせるものである。それは、「単に倫理とか利益とかに関わっている感情を呼び起こすだけではない」。社会形態としてはそこに人々が寄り集まるとい

うことを大前提としてなされている。人が集まるには、道や海や湖が必要であり、そこを無事に通るには、「部族内の連盟関係が必要であり、部族間の、さらに民族間の連盟が必要である。」すなわち、通商・取引・交際や通婚や縁組等が必要となる。そして、このシステムは、個々の要素の寄り集まりでなくして、全体として機能しているのであって「硬直した社会ではないのだし、静態にとどまっているとか、さらに生を失った残骸とかではない」としている。

そして、さらに述べている。

「この全体的給付の体系は、私たちが現に確認しうる限りで、そしてまた私たちが想像しうる限りで、最も古い経済・法体系をなしている。これが基礎となって、その下地の上に交換＝贈与の倫理が浮き彫りになってきたのである。そしてこの体系こそ、その規模に違いがあるとはいえ、私たちの諸社会がこちらの方向に進んで欲しいと私が思えるような経済・法体系と、まったくもって同じタイプの体系なのである。」

☆モースの熱い思い入れが語られているが、同じとは言っていない。

6　私の意見

モースの贈与論では、贈り物を循環させるという贈与のシステムは、その社会にかかわる個人と諸集団が対立的関係になることなく、殺し合うことなく向かい合うという社会関係であるとされている。これが、彼の生きていた 20 世紀の初めの社会には、近代に急速に広がった資本主義経済には欠落していると指摘してその有効性を説いている。

しかし、・・・。私としては、モースほど評価できないのだ。

互酬交換関係が主導的役割を果たしている経済活動では、自由意志で贈与するのではなく、支配・被支配の関係を作り出さない交換関係として、義務として贈与しなければならないことになる。いやでも受け取らなくてはならず、さらに必ず返礼としての贈与をしなくてはならないものとして機能している。そして、これにより同盟関係や協同関係、そして法的とも言い得る社会的関係性をもつことになる。この贈与関係を通して、対立・衝突を平和状態へと導くものである。つまり、このシステムは、平和、そして平等を重視したものであるが・・・。

私としては、・・・。実はこのような社会はそんなに平等ではない。首長とその配下の者たちと一般の人たちという区分はあるし、首長たちは世襲であることが多い。まあ、今日的な国家権力が成立していない、よりゆるやかな関係性の社会である、と言えよう。

ここまでのまとめから分かるように、このような贈与＝交換では、これに関わる人たちの生きていく上での全存在が活性化され熱く関係している。このように、個々人の意識がこの社会システムにきわめて強く拘束されている人間をモースは「全体的存在者」と言い、贈与関係にある社会の中で、人が安定的に位置づけられていることを示している。

＊しかし、今の私たちだって、全的な存在者と言えよう。社会的規定性から免れている人などどこにもいないのだから。ただし、今の私たちは、より複合的であり社会的規制の程度に大きなばらつきがある。

このことは、このような社会で誕生する者は、生まれる以前からかなりの部分があらかじめ決定されていることになる。つまり、個々人の特性・個性、個々人の

努力より、与えられている地位・立場の役を演じることが最大限大切な事とされている。そして、これらをしかたなく演じるのではなく、きわめて能動的に社会参加をしている。社会の拘束性が自主性のごとく様子を示し、そのことによってこの社会秩序が再確認・再強化されているという関係性である。

モースは、このような熱い関係性と現代社会の疎遠性を対比的に観ている。そして、現代の貨幣による商品交換関係の肥大化は人間が生きていく上での脅威となっているから、人間の営みを本来のあるべき姿に、社会の中に取り戻そうと願った。しかし、・・・。

典型的互酬交換(クラ)は、世帯と世帯の間で、そして共同体と共同体の間で存在して機能するものであって、この関係性は、同等な関係性として行われる。如何なる人や部族が上位の地位に立つことを認めないものである。このシステムは、富や権力の集中を抑制するものであり、もっと言えば国家権力の成立を許さないものであるが、このような交換関係を通して、人的交流・交換も行われていた。それが、祝い事や儀式、祭り等を通して次々と循環していた。この贈与と返礼が義務としてだけではなくして、「祝祭的」な関係、名誉や威信や呪術的要素をもつものとして行われてきた。この交換関係がこのような心理的要素を持っているものとして当人たちの間で意識されていることが、贈与や返礼を促す動機であったと、モースは述べている。

だから、この交換形態を、現代的な意味での物・人・事の交換として捉えてはならない。送られた物に対してお返しをするという絶対的「義務を果たさないと、「マナ＊」や名誉や権威を失う羽目になる。権威や「マナ」は、それ自体が富のお守りであり、富の源泉であるので、これが失われると、富を生み守るものも失われてしまう」

＊「マナ」とは、超自然的、呪的な力を意味するメラネシア起源の言葉である。。

こう理解すると、このような贈与関係(互酬交換関係)の現代的意義を理解しても、このような社会関係では、個々人の自由な創造的関係が委縮してしまい、とんでもない不自由な社会となりかねない。今の私たちから観て、とても受け入れがたいように思える。特に、「個人的自由」、そして「匿名の自由」は大きく制限されるであろうことが予想される。贈られた者は必死になってその返済をする。つまり、束縛が強く表れて来る関係性である。このような関係性が主導している社会では、自己確立に向けて苦闘する近代的個人の成立する余地はない。

この経済活動は、自由より平等を!そして、支配・被支配関係を拒否して、協同の硬い絆を作り出すが・・・。このような互酬交換関係の単純賛美は、大きな問題である。特に、この贈与関係が呪術的・感情的な要素を含んだ義務として意識されていては、・・・。未来社会にこの交換関係が主導となることに賛意は難しいし、そうはならないであろうことが予想される。

さて、このようなアルカイックな社会は、私たちとは全く異なっていると言えるが、そんなに遠くはない。このシステムは私たちのすぐ近くに、日々の生活の中に潜んでいるが、実は、私たちとはほんの少し、そして大きくズレているパラレルな世界である。パラレルワールドとは、私たちの世界と昔のある時期までは共通していたのが、その後ズレしまいもう交わることのない別の世界のことである。

実は、このようなズレている世界、社会関係、社会意識は私たちの近くにもある。例えば、田舎の社会と都会生活者の間にあるズレである。同じ空間、同じ時間を過ごしていても、贈与＝交換関係に対する量的・質的な差異がある。田舎に住んでいる私と都市で生育した人たちとは、モノが贈与されたときに感じることが違っているようだ。私などは、何を返礼しようかとすぐ考えてしまうのだが、都市生活者たちはそうではないようだ。私の姉は言う。「都会の人は、何かをあげても、お礼の言葉もない。お礼の電話もない。何にも返してこない。あのような人と関係しても・・・。」家のリフォームをしていた大工は、言った。「都会の人と田舎の人は、全然違う。同じモノに接しても、・・・。」ここに、田舎暮らしにとっぷりと浸っている者の都市生活者への拒否反応が出ている。このように田舎の人と都市生活者とでは人の行き来はあっても、日々過ごしている世界(観)は大きく異なっている。

田舎では、今も贈与と返礼の関係は都市生活者に比べて濃厚に存在している。この関係を通して自分の存在が他の人たちとの関係で成り立っていることを嫌でも感じる。モースの言うような「全体的人間」という熱い関係性ではないが、嫌な人とも無関係ではいられない状況で生活している。そのため、空気まで湿っている。欲と打算と無欲と善意の入り混じった重たい社会関係である。そして、これは、私の若いころのいくつかの可能性を押しつぶしてきたものである。

しかし、現代の都市生活者の中には、このような関係性にあこがれる人たちがいる。理想社会として、贈与経済を思い抱く人たちがいる。「市場での貨幣による商品交換関係」によるパサパサとした空気の中で生活していると、・・・。だからと言って、贈与に伴う倫理性の復活を現代にそのまま求めても、大きな意味はない。

モースがこの中で明らかにしたことは、

- アルカイックな社会では、交換は互酬的贈与の形態で行われている。
- この互酬交換関係は現代社会よりはるかに重要な役割をしており、モノの交換とは人間の全存在のやりとりであり、友愛の関係を築くものである。
- この交換関係は経済的関係にとどまらず、法的・宗教的・情緒的・審美的意味を持っている。

この三点であろう。

「結局のところ、それは混ざり合いなのだ。物に霊魂を混ぜ合わせ、霊魂に物を混ぜ合わせたのだ。さまざまな生を混ぜ合わせ、そうすると、混ぜ合わされるべき人や物は、その一つひとつがそれぞれの領分の外に出て、お互いに混ざり合うのだ。それこそがまさしく契約であり交換なのである。」

「物に憑依＝所有された人、物の引き渡しを原因とする係争に巻き込まれた人、・・・物を持っている、ただそのことだけで、物を受領した人はそれを引き渡した人に対して不安定な状態に身を置くことになるわけなのだ。・・・霊的に劣位にある状態であり、倫理的な不平等をこうむっている状態なのである。」

7 レヴィーストロースの見解

＊以下の引用は、『マルセル・モースの世界』(みすず書房)中のレヴィーストロースによる『社会学と人類学』への序文よりしている。

レヴィーストロースは、「マナ」等の呪術的・感情的な要素を動機として贈与経済が駆動しているというモースの見解を

批判している。「モースにおける呪術的もしくは感情的諸概念の介入は処置すべき廃物のように思われる」、つまり、モースは社会生活を関係の体系として理解することに成功していない、と言っている。アルカイックな社会なのだからといって済ませてはならない。「民族学者が原住民によって煙にまかれている」のであって、「原住民の考え方を取り出したあとで、客観的批判によってそれを還元しなければならない」「社会的事象を、未開人にせよ、人がそれについて抱く考え方に還元しようものならば、それは社会学の滅亡であろう。」とまで述べている。

呪術的・感情的な要素は、「・・・特定社会の人間たちが、ある無意識(＊事物やその関係性の説明がきちんとできない) 的必然性(＊因果関係)を把握する際にとる意識的形態であり、この必然性の理由は別に存在するのだ。」

「我々の社会では、こうした諸観念が流動的で自然発生的性格をもつのに対して、他の社会においては、それらはよくよく考えられた公的解釈の諸体系を基礎づけるのに役立っていること、言い換えれば、我々自身が科学に取っておく役割をそれが果たしていることに存するのだ。」

「マナが、知覚されない一つの全体性の要求を主観的に反映するものにほかならないことを認めねばならないであろう。」

そして、カント的な言葉を続けている。

「つまり、人間はその起源以来、意味作用部の全体を自由に使用できるのだが、それをまぎれもなく与えられているにもかかわらず認識はされていない意味内容部へ割り当てることができずに、ひどく困惑しているということだ。意味作用部と意味内容部との間には常に、神的な理解力であれば解消しうるような不適合があり、それは、意味作用部が、それと重ねあわせられる意味内容部より過剰に存在するところに原因するのだ。だから、世界を理解しようと努力するとき、人間は常に意味作用部の過剰を取り扱うことになる。(そして人間はこの過剰分を、シンボル的思考の諸法則に従って、事物の間に配分するのだ。)」

「思うに、マナに類する諸観念は、それらがいかに多様でありえても、それらの最も一般的な機能(すでにみたように、それは我々の心性や我々の社会形態においても姿を消していない)において考察するならば、まさしく浮動的意味作用部を表している。たとえ科学的認識が、この浮動的意味作用部の流出を防ぎえないのはさておき、少なくともそれを部分的に秩序付けることが可能としても、一切の終了している思考の奴隷として仕えるのは、この浮動的意味作用部なのである。」

そして、次のようにまとめている。

「確かに、マナは同時にそれら(＊モ―スの記述しているたくさんの必ずしも調和していない観念群、そしてたいていは否定的な観念)のどれでもあるのだ。しかしそれは正確に言って、マナがそれらのどれでもないからではないだろうか。すなわちマナは、単なる形式、あるいは一層正確には、純粋状態にあるシンボル、したがって任意のシンボル的内容をも担いうるシンボルではないだろうか。すべての世界論が構成する諸シンボルの体系においては、マナは単にシンボル的ゼロ価値であるといえよう。」＊は私の補説

さて、このような意見も考慮に入れて再度思いなおしてみると、例えば、先ほどのアルカイックな社会での呪術的・感

情的な要素を未来社会展望としては、贈与交換を行うときの別の文化的規範として読み替えることができよう。そうすると、呪術的・感情的な要素も、未来社会では、新たな意味を持ってくる。贈与することや返礼することが素晴らしく良いことであり楽しいことであるとする文化規範が広範に成立すると、この意識が広まる社会システムになれば意味あるものとなろう、・・・。今とは異なる社会経済形態になれば・・・。どのような社会でも、そこにはそれ特有の文化規範は存在するのだから。

さて、私にとっては、モースとレヴィーストロースのどちらが正しいかなんてことは、どちらでもよい。それよりモースのこの著作では、アルカイックな社会と現代社会との関係をきちんと関係づけていないことが問題である。そのため、社会展望としては、はなはだ不十分なものとなっている。私たちの太古や未開の社会ではそうであったという認識結論から、「現代でもこうあるべきなのだ」ということが、未来展望がきちんとつながっていないのだ。

8 トルストイの宗教、モースの「贈与経済」の有効性?

現代において、これがよりよい経済活動として実現されるには、自らの自由意志として行われる時だけであろう。この意識が人間の内部に、心の内に、当然のこととして義務として思われるようになるには、どのような社会システムであろうか。私が先に述べた主権国家の解体、新たな「中世社会」の到来によってか?

トルストイは、これを、宗教的意識の浸透による「慈悲の心」や「人間愛」に基づく贈与経済システムが駆動することを求めているように思える。物語全体に、宗教思想が漂っている。

しかし、これでは、とてもどうにもならない、今の時代から見て陳腐な思想となってしまうが、こう結論付けてしまうのは、これはあまりにも平板な理解であろう。

トルストイが「愛の中にいる人は神のなかにおり、神はその人の中におられます。」と述べていることは、神の国はこの世とは異なる彼岸にあるのではなくして、現実のこの世に存在していなくてならない。神の国は終末によって到来するのではなく、すでに到来している。神の意志は突然の終末で示されるのではなくして、具体的歴史的過程を通して示されるとの意味であろう。つまり、彼は社会的であり政治的思想家とも言えるであろう。だから、彼の説いている宗教を、未来社会を建設しようとする新しい社会思想として解釈することができよう。

近代の資本制生産様式を、「市場での貨幣による商品交換関係」が全面的に主導した社会生活を経過した今日では、これまでの互酬交換関係がはなはだしく薄まり、そしてまた収奪・再分配の経済関係からほとんど恩恵を受けない人たちがでてきている実態があるが、このような時、これまでの宗教とは異なる新しい思想や新宗教が登場するのであろうか。キリスト教における宗教改革や日本の一向一揆のようなことが起こるのであろうか。

こう理解し直すこともできよう。悲惨な生活の到来となった縮小社会での貧しさの中で、「愛」と「慈悲」にあふれる思想が広く深く展開するのかもしれない。トルストイの宗教は、既成のロシア正教そのものではないようだ。彼は、1901 年 73 歳の時、ロシア正教会から破門されている。だから、既成の宗教思想をイメージして

批判してしまうことはできないであろう。

モースは贈与の倫理性が社会に広まることを期待した。しかし、「全体的給付の体系」のような社会に戻ることはできないであろう。アルカイックな社会における人間関係は、このような交換関係を通して熱くべとべとに固まっている。社会倫理が所属している個々人に深く浸透しているのが、「全体的社会事象」と言われているものである。

それに比べて、私たちの今の世界は、自分の存在が他の人たちの存在に負っているという意識は遠く薄くなっている。だからといって、贈与＝交換が主導の社会をそのままこの私たちの住んでいる世界に再度求めても、・・・。

繰り返すが、安易な共同体幻想に陥らないようにしなくてはならない。これは、私の意見であるが、悲しいことに、この安易な共同体幻想への十分な反省がなされていない歴史がある。このことは忘れてはならないことであり、このことについて、いつも細心の注意をして社会構想をしなくてはならない。

こう考えると、モースの『贈与論』で述べていることは、社会構想としての有効性はあまり高くない。彼は、現代でも完全には忘れられていない生活と活動の動機、つまり気前よくモノを与え、消費を楽しむこと、そして客を迎え入れ公私にわたる祭り等の行事の楽しみの復活を夢見た。しかし、アルカイックな社会での贈与＝交換は、単なる楽しみでしているのではない。生きていることのすべてであろう。ここに認識の大きなズレがある。

贈与関係にあるお互いがその存在を込めて物・人・事の交換をすることで、人はその全体性を損なうことがなくより安定的な生活ができることをモースが願っても、このような贈与関係がまだこの世から完全には消滅していないからこの関係性の再復活を願っても・・・。このような意識が当時のフランスの社会運動の基調(底支え)となることを願っても、・・・。

そして、このようなことを記載したモースの意識は、実は覚めている。アルカイックな社会のように熱くない。「市場での貨幣による商品交換関係(2)」主導の社会に生きているのだから、それは当然であろう。彼は、贈与＝交換による逃れられない社会的拘束の中で生きているのではない。それなのに、彼はこのような関係性を自らの意志で選択する人間像を想定して語っている。ここに、モースの社会構想には、大きな問題がある。現代人は、特に都市生活者の社会認識は、アルカイックな社会とは遠く離れている。

贈与＝交換という経済形態はその変型の程度によってだんだんと弱くなり、交換の場での全存在をかけるということも、時間的遅延化により大きく薄まってくる。その場での存在をかけての贈与という深刻さ、切実さも、・・・。そして、現代がある。今の私たちから観て、この本に書かれているような贈与関係は、そのままでは煩わしく危険なものであろう。

先にも書いたが、モースの論は、現代社会との関係性がきちんと整理されていないのだ。夢と希望が混交している。彼は、アルカイックな社会については、次のようにも書いている。

「私が記述してきた社会は、・・・すべて分節社会である。」

この「分節社会」とは、「(森山工氏の訳注によると)ゴカイ、ミミズ、ヒルなど、一般に細長い円筒形で、前後に連なるほぼ同じ構造をもった多数の環節からなる生物がイメージされている。デュルケームの社会類型論において、分節社会は

複数の同型集団が並置されて結合することによって成り立つ機械的連帯を特徴とするものとして概念化されている。」

つまりは、強力な国家権力が形成されていない社会なのだ。

「依然として社会はクラン(氏族)を基盤として形成されていた。そうでなくとも、少なくとも大家族を基盤として形成されていて、そうした大家族は程度の違いこそあれ、内部においては未分化であり、外部に対しては相互に独立していた。」

このような社会に対して、私たちの住んでいる社会は、同型ではない複数の集団に役割分担と階層化されて、それらが相互依存するかたちで構成されている。先の機械的連帯ではなくして、有機的連帯と言い得るものによって社会が統合されている。(＊森山工氏の訳注)

モースはこのように述べていながら、アルカイックな社会における社会システムに、過剰な期待を寄せている。

しかし、「市場での貨幣による商品交換関係(2)」主導の社会には多くの問題がある。だからこそ、モースの指摘は意味あるものであろう。多くの人間の日々の生活から大きくかけ離れてしまい悪の要素ばかり目立ってきた現状の社会経済から、私たち人間が本来持つべき全体性(私たちの存在は、他の人たちとの関係によって活かされていることを日々体感できる＝これこそが生きる意味)を再度回復しようとした視線は、大変意味あるものであろう。彼は、現代においてもモノは市場価値以外の価値も持っていることに注目して、私たちの生活が「市場での貨幣による商品交換形態(2)」そのものになってしまうことがないことを知っていた。これは、トルストイも同様であろう。ここに、意味がある。

さて、私たちは、ある領域では、ある地域では、ある人たちとは、今も部分的贈与関係にある。これが、社会全体とはどの程度関係しているのであろうか。社会からの拘束力は、個々の人間には同じようには表れていない。個々人の行為が社会全体とつながっているという意識を取り戻すには、どのようにしたらよいのであろうか。この贈与＝交換関係を私たちがより意識的に多用することで、本格的縮小社会では私たちの暮らしはなりたつのであろうか。

9　社会の構造改革を!

最後に、最初に述べた三つの経済形態の「コントロール」ということについてまとめたい。

ルソーの『エミール』には、次のように書かれている。

「万物を作る者の手を離れるときすべてはよいものであるが、人間の手に移るとすべてが悪くなる。・・・人間は醜いもの、怪物を好む。何一つ自然が作ったままにしておかない。人間そのものさえそうだ。」

プルードンもよく似たことを言っている。人為の思想による社会のコントロールは難しく、多くの悲惨な社会問題を招いてきた歴史を知らなくてはならない。モースの言っているような「バランスよくまじりあうこと」は、大変難しい事であろう。「美しいことを夢見て、醜いことをした＊」歴史がある。だから、多くの人々が自覚的人間となるなんてことを想定した壮大なロマン的思想に留まってはならない。繰り返し言うが、単純さ・わかりやすさを求める社会思想に振り回されてはならない。雑多な社会関係を含んでいる複合的社

会システムを、私たちは見出さなくてはならない。

＊『とんでもないことが一美しいことを夢見て醜いことをする』青野豊一(図書新聞社)に、このことをしつこく記載した。また、いつになっても変わらない田舎の閉鎖性の問題点も書いている。

さて、ここまで論を進めて来たのだから、私たちは今後どうしなくてはならないかをはっきりしなくてはならない。

今後の本格的縮小社会に向けて、私たちがなすべきことは、贈与＝交換関係を私たちがより意識的に多用することに夢を託することに留まることではないであろう。今の社会システムが崩壊した時、あるいは、より豊かな人間関係を築こうとして個人的に贈与＝交換関係を盛んに行うことは、大いに歓迎すべきことである。このようなことは、私もたくさんしていきたいものである。しかし、これは個人的思いである。未来社会展望ではない。このままでは、多くの人たちが理性的・意識的・自覚的に生きることを夢見ているロマン的夢物語そのものであろう。ここから次に行かなくてはならない。ロマンにひたっていてはならない。

モースの物語にも、夢と現実との揺れる心が表れている。ある時は熱く思いを抱き、ある時は冷静に現実社会を観ている。

「真の革新、偉大で称賛に値する革新によって、もはや時代に合わなくなった倫理段階を乗り越え、贈与経済を乗り越えて先に進んだのはローマ人とギリシャ人なのだ。贈与経済というのは、あまりにも運任せで安定性が無く、あまりにも高くついて無駄が多いから、贈与経済というは、人対人のさまざまな思惑で満ち満ちていて、市場・経済・生産の発達とは両立しえず、つまるところ当時にあっては反経済的となっていたから。」

このようなことまで述べている。そして、覚めた意識で現代的課題として、

「私の考えるところでは、・・・市民があまりに善良であり自覚的であるなどと期待してはならないし、逆に市民があまりに他に無関心で現実主義的であるなどと決めつけてもならない。必要なのは、市民が自分自身について敏感な感覚をもつこと、そしてそれと同時に他者についての、社会的現実についての、敏感な感覚をもつことである。」

と、まで言っている。

これは自主的＝強制的に社会参加をして、それが体感できる社会となることを述べたものであろう。義務＝自発的なものとなる社会システムとして、自分と他者への敏感さを獲得してそれを維持できる複合的社会システムとして、モースはアルカイックな社会における贈与＝交換システムを一つのモデルとして提示し、現代社会においても「全体的人間」へと近づける方策を求めている。これは、先に述べた「義務」観に集約されて示されている。義務とは規範に基づいた法的なものであり、仲良くなるための義務＝自発的なものであった。自分の利益に執着すること、自分の利益にこだわらずに無私無欲であること、この二つの意識が混然一体となって富の循環をもたらしているというシステムに、モースは期待し夢を抱いた。私はこの視線を評価したいが、この視線をもっと前に進めて思考しなくてはならない。

私たちは、今、砂粒のようにバラバラになっている感覚で生きている。ともすると、家族さえも・・・。しかし、モースの言っているように、都市生活者も完全なバラバラ状態にはならないであろうが。

砂も水分を含めば丸く固まることができる。人間社会におけるこの水とは何であろうか。モースの描いた贈与＝交換関係はべとべとしている糊である。そうなると、砂を一時的に固める水分の働きをしているのは、現代の人々を集めて関係性を形成しているのは市場における金銭による商品交換関係となる。しかし、部分的ではあるが、互酬関係も存在している。ここに、一つの可能性を見出し贈与＝交換関係へと希望を託する人たちが繰り返し出現するであろう。だから、私は言いたい。「贈与経済」にあこがれても、それが社会全体を主導するようなシステムはなかなか実現しない。そして贈与＝交換関係の問題性をきちんと認識しなくてはならない。その上でこの夢を徹底して語らなくてはならない。

まずは、国家的レベルでは、現状の資本主義経済への規制を国家行政が強めていかなくてはならないし、政治の在り方やその組織の在り方を改革していかなくてはならない。しかし、ここでは、「国家や社会全体のことを考慮しなくてはならない」等という言い方で、痛みを伴う変化を望まない人たちの意見に沿った結果となかねない現実にぶつかることが予想される。そしてさらに、いっそう複雑極まりない制度を作り出して官僚機構を強化させる結果となりかねない・・・。それでも、私たちはなすべきことをしなくてはならない。

贈与＝交換関係が大きく意味を持つ社会となるには、最初に示した三つの交換形態を組み合わせてうまくコントロールするというよりも、繰り返し社会の「構造改革」をすることがまず必要な事であろう。資本制経済を規制したり、国家行政の在り方を変えていくことで、この三者関係を変容させていくことが大切なことであろうと思う。私たちを取り巻く三つの交換形態が、今とは量的に、そして質的にも異なるモノへと変容しなくてはならないであろう。まず、収奪・再分配をする行政の在り方、そして、市場での貨幣による商品交換の在り方が変わらなくてはならない。そうなった時、贈与＝交換が大きな意味のあるものとなるであろう。そう、モースの言う「全体的社会事象」のように混然一体となって、・・・。

未来の縮小社会では、生産・消費協同組合や共済組合等が社会を牽引していくことができるようになり、社会の各分野や領域に、多様な自主的協同組織が組織されれば、・・・。それらよって、個々人の自由も発揮できる社会となれるかもしれない。その時、「贈与」という交換（互酬制）形態が、モースの願いに近づくことができるかもしれない。

そして、私たちがなすべきことは、もう一つある。国家的レベルではない狭い範囲の地域レベルで具体的改革を実践していくことである。社会経済が衰退しても、身近な関係で贈与＝交換関係を盛んに行うことである。でも、各地域にはそれなりの毒があり、一筋縄では事が運ばないことか予想される。そこで、まず、心通う友人・知人等の小さな協力的なグループで、・・・。このことは社会展望として先に否定したが、生活防衛としては、このような狭い範囲の関係性は意味があるであろう。今より濃いしっとりとした人間関係に嫌気がさしても、贈与されて負い目を感じても、市場経済も機能しているのだから、贈与＝交換関係のマイナス面を相殺できうると思われる。このような取り組みの中から、友人の友人、知人の知人へと、普段会話することもない人たちを含めた個人的関係を越えた

関係性を周囲の人たちに広げていける場の設定の工夫を焦らずに試行錯誤することが大切であると思われる。

しかし、このようなことは、やはり一人ではできない。周囲の人々に、経済成長という夢から目覚めることを、事あるごとに、働きかけなくてはならない。ここ数年で、「縮小社会」という言葉への反発は、大きく減少している。確実に、人々の意識は変わってきている。だから、今こそ、別の夢を語りかけなくてはならない。この別の夢が語られないと、多くの人たちがファシズムへと流れて醜悪な喜劇を繰り返されてしまう。

そのためには、私たちは、もっと覚めなくてはならない。ここに、現代社会を批判する一つの夢物語(理想)として互酬制(性)経済を活用した社会へという大きな旗(未来像)を掲げることは、意味があるであろう。

だとすれば、もう一度言いたい。人は理屈だけでは思考が喚起されないし動かないのだ。物語性のある未来像が指し示されたとき、その言説の空間の中に自分が位置づけられた時、問題を自分のこととするのだ。だからまず、

①意識ある人たちの問題意識を自己物語として語らなくてはならない。論文では人の心には届かない。

②また、贈与＝交換関係の夢の旗をペン先から大きく広く高く掲げようではないか。ベーシック・インカムも、一つの夢なのだ。友愛の意識を涵養するものとして、それなりの意味がある。このことについてのいくつかの問題があるにしても・・・。そして、地域経済における贈与＝交換関係の夢を!

さて、先にモースの贈与論によって整理したアルカイックな社会がある種の高度な社会システムであるとしたが、これから本格的に到来する縮小社会においても、さまざまな工夫をこらした高度な複合的(複雑ではない)な社会システムにしなくてはならないであろう。これは、間違いないことである。単純さ・分かりやすさという言葉に騙されてはならない。

現状の制度を次々と改正(複雑に)して運用する官僚機構を強化するのではなく、私たちが自主的にしていくことに努めなくては、・・・。

モースの『贈与論』は第一次世界大戦という愚かな行為への深い反省(モースと深いつながりのあったジャン・ジョレスは、1914 年国粋主義者に暗殺されている)に基づくものであり、ポランニーの著作は第二次世界大戦への反省であると言っている人がいたが、今後、経済成長という幻想を追い求めてエネルギーの奪い合いの果てに第三次世界大戦が起こるかもしれない。その時は、人類絶滅の危機をはらんだものとなるのは必定である。

社会は、ますます煮詰まってきている。アメリカに、あのような大統領が登場するとは、・・・。生活苦や痛みや苦しみを抱いている人たちが増えているのに政治が具体的解決策を提示できない時、人々を煽り立てて社会内のある少数派への攻撃をする政治家が登場する。このような歴史を、私たちはもうすでに経験しているはずなのに、・・・。

悲劇の歴史を繰り返さないために、私たちは、「生身の身体を介在」させた諸活動を通して、今、何をしなくてはならないのかを考えなくてはならない。

2017 年 3 月

『崩壊5段階説―生き残る者の知恵』
ドミートリー・オルロフ　大谷正幸訳　新評論

「現代社会が依存している政府は、所有権を擁護し、契約を守らせて商業を規制している。経済が拡大すると政府機能が大きくなり、官僚機構も拡大し、法律、規制、手続きも増えてくわけだが、その中でも最速で拡大するものはコストである。この公的営みのすべてが時間の経過とともに加速度的に複雑性を増すことを示している。」

「新たな問題が解かれる必要が生じるたびに、何らかの部署がその構造に加えられることになるが、既存の部署は取り除かれないままとなっている。なぜならば、複雑な配置を単純化することは常に、さらに複雑にするよりも難しいことであり、より費用が嵩(かさ)むからである。だが、社会経済における複雑性はコスト抜きでは成り立ち得ないわけであり、経済が頂点を過ぎて縮小し始めるや、このコストが途方もなく高くつくものとなる。」

「政府は、主として課税によって存在しているということを忘れてはならない。経済が傾いて課税基盤が縮小しても、政府の社会的活動や危機の緩和のためのコストは拡大するばかりである。高くなるばかりの税率に人々は納税する余裕がなくなる。それにもかかわらず、ほとんどの政府がさらに増税して、結果的に闇の経済活動を駆動することになる。」

「貧困と失業が蔓延するなかで、人々は生きるためにますます非合法な商業活動、非公式な協定、物々交換、贈与および自給経済に頼るようになる。それにつれてこの悪循環が増幅して、政府は衰退するか、生き残りのために犯罪的な活動に向かうか、あるいはその両方に進むことになるだろう。」

「市場経済は、物語を台無しにしない脇役に限るというのが最善となる。」

「あなたは、ある状況で機能する、ローテクで安くてもっとも堅固で維持管理可能な解決策を学ぶことができ、消費者の軛から抜け出すことができるのであろう。あなたは、食糧生産、住居の維持管理、輸送、娯楽などのために閉じた循環システムを創出することができるだろう。」

「もっとも重要とされるのは、人間味のない人間関係や慣行への依存を減らすことに取り組むことだ。あなたは貨幣やその等価物に頼ることを避けるべく学ぶことができ、代わりに、贈与やそのさまざまな拡張と普及に頼ることを学ぶことができる。あなたは新しい習慣と儀礼を作り出し、正しい向きの新たな文化の基盤を整えることができるだろう。」

・・

＜付け足し＞　常井健一　現代ビジネス 2016/10/5 より
「角栄ブームに違和感を持つ人たちへ―反田中を貫いた、元総理の証言―」　*ぜひネット検索を!*

■角栄ブームに沸く日本。ノンフィクションライターの常井健一氏は、「スゴイ角栄」ばかりが近視眼的に語られる風潮に違和感を抱き、別の視座から眺めてみようと、反田中を貫き通した菅直人元総理のもとに足を運んだ。

■小沢政治と田中政治　―現代人が田中角栄に郷愁を寄せるのは、強いリーダーシップで現状を打破してほしいという願望があるからだと思います。自民党政権でも民主党政権でも総理の顔がコロコロ変わった。それに端を発した政治不信は東日本大震災の対応で一気に高まった気がします。特に、菅政権の時、自民党との連立も一時は浮上しながら頓挫した。政治に「if」はありませんが、田中角栄のような「決断と実行」を声高に唱えるリーダーが当時の総理だったらどうだったのだろう、と考えてしまいます。

菅：　あれは、やや特殊な事情がありました。自民党総裁だった谷垣（禎一）さんは人がいいから、私はとにかくサシで会って、連立について話したいと思っていろいろ工作した。特に、加藤紘一さんに仲介を頼んだ。それで、やっと会えるかなと思っているとどこからか横やりが入った。結局、自民党の中には民主党政権を一日も早くつぶすことを優先した勢力がいたんです。自民党は「みんなで対応しましょう」と口では言うけど、谷垣さん自身もそう思っていたと思うけど、その後ろにいる人たちは民主党政権を倒すことを優先して行動した。あとは、小沢（一郎）さん。小沢さんはとにかく自分のいうことを聞かない総理だったら、自分の党の代表であっても徹底的にやりこめる。私が総理の

時には、野党が出す不信任案に賛成することもチラつかされた。自民党と小沢さん、この 2 つに挟まれてなかなか苦労しました。

■原発と角栄 ―菅さんは総理時代、国産原子炉の輸出推進を掲げました。いわば原発推進だった菅さんが退任後は脱原発を訴えるようになった。そうなった経緯を教えてください。

菅： 私が最初に所属していた社会民主連合という政党では、原発に対して結党時（78 年）から「モラトリアム」という発想を掲げていました。池山重朗さん（元原水禁事務局長）という反原発運動をやっていた人がメンバーにいて、最初の政策集には「即、やめる」ということではないけど、安全性の確保できない現在の原発は一時停止させるということを書いた。・・・。それが、民主党ができる頃には、私も含めて、チェルノブイリ事故はソ連という技術的に未熟な国の中で起きた問題であって、日本では起きないという「安全神話」にだんだん毒されてきて、半ば原発容認の立場になったことはその通り。しかし、3・11 があって、私は 180 度考え方を変えました。

■田中角栄は総理時代に電源三法（74 年成立）を作り、原発推進の仕組みを整えた。地元では柏崎刈羽原発の用地を東京電力に売却して 3 億 4000 万円を手にしています。菅さんは今、原発政策を徹底的に検証していく中で角栄の影を感じることありますか。

菅： 影どころか、原発政策の基礎は全部、角さんが作った。田中内閣の時にできた電源三法というのは、簡単に言えば交付金というカネで地域全部を買収しちゃうわけ。当初は経済効果もあって、角さんの地元・新潟にも柏崎刈羽原発を作ってプラスになった部分もあるけど、そのカネの恩恵にいまだに与かっている。だから、原発のある選挙区から出てきた議員はみんな「再稼働させろ！」と言うからね。「地元だから事故が起きたら一番危ないからやめてくれ！！」ではない。（角栄氏は）若い頃から議員立法を作っていたんだから、能力は極めて高い。社会の動向を読み取るセンス、政治的センスも高い。その一方では、カネの使い方にも非常に優れている。原発は一番利権が大きいから。道路行政もものすごいお金があらゆる業界に流れる。それに匹敵するのが原発行政で、だから角さんは電源三法を作った。さらに郵政、農業土木、土地改良と地域をカネで買収する政策を編み出した。土建業だけじゃなく、地主も労働組合も同調しちゃう。とにかくカネの威力はすさまじいんだ。原発はカネにもなり、集票にもなる。政治家にとっては二重にいいんだよ。

■田中角栄を必要とする不幸 ―総理時代、「最小不幸社会」という造語で自ら国家観を示したことがある。「自分の力で幸福になれる人は自分の力でなればいい。しかし、自分の責任ではないことで不幸になる人、例えば親が病気になった人たちの不幸をできるだけ少なくするのは権力の側にある政治の役割ではないかと思うんです」それは、「最大多数の最大幸福」という大量生産・大量消費社会のテーゼに対抗する私製の理念であり、右肩上がりの時代に角栄が著した『日本列島改造論』とは逆方向を目指す進化論であった。高度成長の末期、住宅地の土地高騰が蝕む生活者の不幸を目の当たりにした転勤族サラリーマンの息子（菅直人）は、空前の田中角栄ブームを歯牙にもかけなかった。むしろ、『改造論』に書かれた国土開発計画によって土地の買い占めが起こり、地価高騰が深刻化する惨状を看過できなかった。そして、81 歳の市川房枝とともに立ち上がり、・・・。その直後、公害仲間たちと創刊した市民運動の機関紙には「最大多数の最小不幸のために」というスローガンを掲げた。・・・菅が指摘するように、現代に生きる我々は角栄が遺した時代遅れのレガシーが引き起こす不幸もイヤというほど体験してきた。その典型が、東日本大震災による福島第一原発事故であることは言うまでもない。人間の欲望も理性もカネとポストで割り切らせながら国家ぐるみで突き進んだ「明るい未来のエネルギー」が、共同体の絆をグロテスクに引き裂くほどの凄惨な破壊力を帯びるとは、・・・。

「英雄がいない時代は不幸だが、英雄を必要とする時代はもっと不幸だ」